The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代(モダン)の構造と身体性 : 器官なき身体にみる内在的な生成性と変革性
Author(s)	前田, 雅司
Citation	年報人間科学. 2004, 25, p. 65-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12546
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近代（モダン）の構造と身体性

――器官なき身体にみる内在的な生成性と変革性――

前田　雅司

〈要旨〉

理性＝ロゴス中心によって構成される近代（モダン）の構造は、身体性／身体的なるものを非理性的なものとして抑圧・排除することによって、主体―客体、主観―客観の二項図式を成り立たせてきたがともいえが、そうした近代（モダン）の構造を超克する上で、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリによる器官なき身体の視点から、これまで抑圧・排除されてきた身体性／身体的なるものの問い直しを図っていくこととする。

そこで捉えられる器官なき身体は、差異化＝微分化の過程において、多様な力動的な流れを生み出す生成運動の面から捉えられており、そこに見出される欲望は欠落を埋めるものではなく、むしろ過剰性そのものであるとみなされている。そして、器官なき身体は、言説化され、器官化された身体としてではなく、欲望する生産の下に、多様な強度を潜在させた未完結の身体として捉えられているといえよう。

そのような器官なき身体においてみなければならないのは、単一的なモル的構造に基づくマクロな視点ではなく、ミクロな視点から微細な差異の流れが織り成す分子的な運動であり、その内在的な生成過程において如何に身体／身体的なるものが多様な形で立ち現れてくるかであるといえ、その個別的な出来事性との関わりから内在的な変革の可能性を見出していくことが近代（モダン）に抗する上で必要とされているのである。

キーワード

器官なき身体、差異化、内在性、多数多様性、生成変化

1、近代（モダン）の構造と身体問題

ＩＴ（情報技術）の発達により様々な現象が複雑なままシミュレートすることが可能となり、カオス理論、フラクタル理論、あるいは複雑系の科学にみられる自然科学のパラダイム転換の流れが起こっているといわれて久しい。そこには、これまでの自然科学が行ってきた超越的な眼差し＝観察者の視点による単純な図式化では、人々を取り巻く現象や事象の複雑な動き、あるいはその構造の揺らぎを解き明かすことができないという認識が共有されてきたことをあげることができるだろう。言い換えれば、現実に生きたシステムは、複雑に折り重なった構造から成り立っているのであるが、それを全体の枠組みから切り取り、単純化する科学者、すなわち観察者の視点＝主体が問題となってきているのである。

近代科学は、主体―客体、主観―客観の二項図式の下に、観察する側の主体を不問に付したまま、客体である自然を対象化し、理論化を行ってきた。その際、不問に付された主体は、あたかも世界の外部に立つ超越的な存在であるかのように位置付けられることになる。それが、近代的合理主義の名の下に、今日まで科学者＝観察者の主体を形作ってきた訳であるが、考えてみれば、そうした科学者の主体そのものも、世界内存在として様々な現象や事象に関わっているのであり、生きたシステムの一部として組み込まれているのである。その意味では、観察することそのものが、すでに何らかの形で対象に影響を与えているといえるのであり、そのことからも対象を客観視する超越的な主体というものが、近代（モダン）が生み出した虚構以外の何者でないことは明らかであるだろう。そうしたことが、これまで科学的信仰として信じられてきたのであるが、カオス理論等を通じて、現在揺らぎだしてきているのである。

このような自然科学における動向は、現代の哲学・思想で問われている問題と軌を一にしているといわざるを得ない。構造主義以降、近代（モダン）が前提としてきた確固たる主体性といったものが、理性＝ロゴスやファロス等と共に疑問視されてきている。そこには、資本主義システムのグローバル化と共に進展してきた近代化の過程が、行き詰まりの様相を示してきているという背景があるように思われる。

では、このような近代化における主体性とは、一体如何なるものであろうか。私が私であるということ、その個の確立を前提にして、近代化は進められてきた。すなわち、世界を対象化し、因果関係／単線的（リニア）な構造を吊り支える中心＝ゼロ記号として、唯一絶対的なものとして、私なるものは構成されてきたのである。このことは、私＝主体を軸にした同質的な構造が築き上げられてきたことを、そして、私＝主体の範疇に捉えられないものは、異質なるもの、他なるものとして排除されてきたことを意味する。近代科学における自然を対象化する観察者の絶対性も、活字印刷技術以降のテクストに対する著者性の優越性も、同一的な問題として、近代化に対する主体性の確立との関連の中で問わなければならないのである。

このように私が私であること、その主体性は、近代化の過程において構成されたものであり、他方、我々は近代的な構造に自己を投影することによって自らの主体を形成してきたのである。それが、今日まで絶対的なものであるかのように人々のあり方を拘束し、規定してきたのであるが、現在こうした唯一無比なる主体性の根拠が問われるようになってきているといえよう。

このような近代化における主体性について、ミシェル・フーコーが言説（ディスクール）と権力（ポリティクス）の問題として捉えたように、同質的、均質的な構造を反復させていく力（ポリティクス）のあり方に対して、異質性とどのように向き合い、また、生成変化していく能動的な運動体として自己をどう捉えるかが、新たな形で問われるようになってきている。そのような近代／モダンの批判的な乗り越えを考える意味で、現在身体性／身体的なるものの見直しが行われるように考えられる。

では、これまで身体とは如何なるものとして捉えられてきたかというと、近代（モダン）においては、理性／ロゴスに反するものとして位置付けられてきた。つまり、身体は、理性／ロゴスから排除された本能や感性、情念、狂気等の負性を押し付けられてきたといえるだろう。正に、身体とは、反近代そのものであり、抑圧の対象であったのである。それだからこそ、逆に抑圧されてきた身体性を解放することによって、逆に近代（モダン）を問い直しができるという構図となっているともいえるのである。

その場合、身体性の復権をもって批判が行われ、そこには、あたかも近代／モダンが描く図式、その権力関係によって犯されていない純粋無垢なる身体性／身体的なるものが何処かにあるかのように語られることが多い。だが、そのような自然な原―身体といったものがどこかにあると捉えること自体が、近代（モダン）が構成する枠組みにおいて考えられているにしか過ぎないのではないだろうか。自分探しの物語が最終的に近代的な主体化の構造に回収されてしまうように。そのような身体性／身体的なるものへの回帰といっても、我々の捉える身体的なるものは、すでに何らかの意味で構造化、意味化されたものであり、それ故に我々は身体を認識できるともいえるが、そうした無垢なる身体があり得るかが大きな問題として立ち現れてくるといわざるを得ない。結局無垢なる身体とは、近代的な意味で社会的に構造化、分節化された身体の裏返しとして想定されたものでしかなく、最終的に文明対自然、理性対狂気、男性性対女性性という二項関係に集約、還元されてしまいかねないように思われる。その意味では、単純な形での反近代という図式に収まらない形で、どのように身体性／身体的なるものを捉え直していくかが課題となってこざるを得ず、更に、近代（モダン）というひとつの起源に基づく構造化に人々をアイデンティファイさせて離さない、そうした超越的な主体性を形作る権力性――理性＝ロゴス中心主義――をどのように脱中心化させていくかが問われることになるといえるだろう。

その意味では、以上のような近代（モダン）の構造を超克する上で、これまで抑圧・排除されてきた身体性／身体的なるものとは異

なる形での捉え直しが必要であるといえ、本論では、そうした身体性の問題について、先ずジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリによる器官なき身体を取り上げ、如何に近代（モダン）における資本主義システムを問題にし得たかをみることにする。そして、そのことを通じて、近代（モダン）の構造化において構成される超越的＝一者的な近代的主体、またその結果として事後的に見出される身体ではなく――それは、超越的な視点から外在的に身体を捉えているにしか過ぎない――、自らを含みこんだ形で展開される主体化の形成過程において、どのように身体／身体的なるものが個別的な出来事性、その内在的な生成過程によって立ち現れてくるかを捉え直すことにする。その場合、社会的に制度化され、完結した単一的構造――それを本論では構成された構造として位置付ける――と、微細な差異の流れの中で多様性に開かれながら生成する構造化の強度＝構成する構造とを対比することになるといえ(1)、そうした制度と生成とに引き裂かれながら現れる複数の身体性／身体の複数性そのものの揺らぎ＝ずれが問題となってくるといえよう。そこに、ミクロ政治学における内在的な変革の可能性を捉えることができるのではないだろうか。そのような身体の生成と強度のあり方を捉えていく上で、以下器官なき身体の視点から身体問題を捉え直し、その有効性をみてみることにする。

2、器官なき身体からみた身体問題

2・1、器官なき身体と欲望する諸機械

では、器官なき身体とは如何なる身体として捉えられているのであろうか。

ドゥルーズとガタリは、器官なき身体を欲望する諸機械との関連の中で、近代（モダン）の構造を捉え直す新たな視点としてみなし、過剰性を肯定する哲学から位置付けしようとする。それは、負性の面において完全な安定的な状態から逸脱、欠如した存在として人間存在を位置付け、それを補う意味で欲望を満たしていったとみるのではなく、本来過剰な欲望を持った存在として、肯定的な形で捉え直そうとするためであるといえよう。そこで位置付けられている欲望する諸機械は、差異化＝微分化の過程において、多様な力動的な流れを生み出す生成運動の面から捉えられているといえ、そこにおいて見出される欲望は欠落を埋めるものとしてではなく、過剰性そのものであるといえる。そして、器官なき身体は、言説化され、社会化された器官化された身体としてではなく、欲望する生産の下に、多様な強度を潜在させた未完結の身体として考えられているといえよう。そのことによって、近代的な構造――それは、資本主義システムにおける公理系＝循環的構造とエディプス・コンプレックスによる欲望の三角形＝円環的構造として捉えられている――を批判的に乗り越えていくことが目指されている。

そのため、単一的なモル的構造に基づくマクロな視点――それが、

単純な二項図式を再生産することになるのだが――に対して、ミクロな視点から微細な流れが織り成す部分相互の動きを分子的な運動として捉えることが必要であるとみなされており、そのような分子的な状態が、欲望を機械的な接合の内に多様な流れとして、開かれた内在的な過程として位置付けられなければならないと考えられている。そして、そこで捉えられる身体は、いわゆる人々が日常的に認識している身体ではないのはいうまでもない。我々が日々当たり前の如く感覚している身体なるものは、すでに何らかの意味で、構成された構造において構造化、言説化された上でのものであるといわざるを得ない。そこには自然的な意味での無垢なる身体性等といったものはあり得ず、あくまでも定型化された枠組み内において再表象化された身体であり、社会化の過程において内面化された他者なる身体なるものなのである。このような日常化された身体に対して、ドゥルーズ―ガタリは、器官なき身体を欲望する諸機械との関連の中で捉えようとする。

では、そこで捉えられる欲望は、端的にいって、多様体を形成する実在的な生成過程の内に見出されるものであり、差異化＝微分化の運動において接続と切断の流れを繰り広げる内在的な生産する欲望であるとされる。こうした捉えられる欲望する諸機械は、欲望と生産という異なったものが組み合わさることで、内在的な生産の流れ、その接続的な運動を浮かび上がらせようとするものであり、そこに欲望する生産を見出そうとするものである。また、その欲望する生産とは、生産の生産として、ひとつの機械と別の機械とが接続と切断を相互に繰り返すことで、欲望の流れを生成させていくことであるとされている。つまり、欲望する流れが、と(et)を介して――〈これ〉と〈あれ〉と〈それ〉と……というように――、次々と接合し、組み合わさることで、内在的な生成の運動を繰り広げていくことであるといえるだろう。そこでは、欲望する諸機械は、内在的な生産の過程における開かれた過剰なる諸欲望／部分対象として捉えられている。

「欲望する諸機械は二項機械であり、二項規則《つまり、つながりの体制》の下にある機械である。ひとつの機械は常に他の機械と連結している。生産的綜合《すなわち、生産の生産》は、「これと」et「これの次にある」et puis… という接続的な形態をもって作動する。ということは、ここには常に流れを生産する機械〈と〉et、この機械に接続されてこの流れを切断し採取する働きをするもうひとつの機械〈と〉etが存在するということである。……したがって、二項系列はあらゆる方向に単系的線型状に〔多岐的ではなく〕のびてゆくことになる。〈連続する流れ〉と〈本質的に断片的なまた断片化した部分対象〉との間に、欲望はたえず連結を実現し続けることになる。欲望は流れを起して、みずから流れ、そしてみずから切断するのだ。」(2)

こうした欲望する諸機械に対して、器官なき身体は、正に未だ未分化な状態にある身体であり、ひとつの定型化された形に完結していない未完結な身体である。卵は、細胞分裂／多様化＝微分化する前の潜在態として、機能的に分化されていない器官や部分を持たな

い存在である。それ故、どの部分がどのような器官になるか、自らも知りえない存在として、あらゆる方向に生成変化が開かれた、生成途上にある状態にあることとなる。その意味では、器官なき身体は、ひとつの全体として統一的な存在でもなく、様々な諸部分からなる存在でもない。多対一、全体対部分という二項図式に収まることのない、全体と諸部分が奇妙な形で共存している差異の強度を伴った潜在的多様体であり、生産そのものが宙吊りになった未分化な様々な強度に開かれた多様体として、充実身体／強度＝ゼロの潜在態なのである。

「それはイマージュをもたない身体なのである。こうした器官なき身体そのものは、非生産的なるものとして〈単線的線型状の二項系列〉の第三の時点において、それが生みだされるまさにその場所に存在するものなのだ。この器官なき身体は、ここからまたあらためてたえず生産の過程の中に投入されてゆくことになる。……器官なき充実身体は、反生産の領域に属しているが、しかし、生産をこの反生産に《つまり、反生産の領域に》連結することが、やはり接合的綜合《すなわち、生産的綜合》のひとつの性格なのである。」(3)

それ故、ドゥルーズ―ガタリは、器官なき身体をひとつの統一的な概念で括ることを行わず、微妙にずらしながら多義的な意味合いで使っていく。それは、内在的な過剰な存在として一とか多とかといった次元を超える多様体であり、強度の流れを生成し、接合する潜在態であり、そして、生産過程の中で種々の諸部分の傍らにある統一体／全体であるといったように。つまり、器官なき身体は、反生産による無定型未分化な流体であると共に、欲望の強度を生み出す根源として多義的に捉えられていることになる。そのことを通じて、ドゥルーズ―ガタリは、否定的な人間観、その不完全へと逸脱した負性性による近代／モダンの構造化――資本主義機械やエディプスの抑圧的帝国主義による――を超克するべく、肯定的な欲望の哲学を展開しようとしているといえるだろう。そこで重要な視点となってくるのが、無意識の生産、欲望の生産過程を捉える分裂者分析＝スキゾ分析であると考えられており、パラノイア（神経症）によるエディプスの構造化から如何に強度の逃走線を引くかが問われることになる。

2・2、器官なき身体と原―暴力性

こうしたドゥルーズ―ガタリが提示する器官なき身体は、アントナン・アルトーが自らの分裂する身体感に基づいて唱えたものによるが、ドゥルーズ―ガタリは、アルトーの器官なき身体を再評価して、次のように述べている。

「ＣｓＯ〔器官なき身体〕は器官に対立するのではなく、有機体と呼ばれる器官の組織化に対立するのだ。アルトーは、確かに器官に抗して闘う。しかし彼が同時に怒りを向け、憎しみを向けたのは、有機体に対してである。身体は身体である。それはただそれ自身であり、器官を必要としない。身体は決して有機体ではない。有機体は身体の敵だ。ＣｓＯは、器官に対立するのではなく、

編成され、場所を与えられねばならない『真の器官』と連携して、有機体に、つまり器官の有機的な組織に対立するのだ。神の裁き、神の裁きの体系、神学的体系はまさに有機体、あるいは有機体と呼ばれる器官の組織を作り出す〈者〉の仕事なのだ。」(3)

では、そのアルトーにとって、器官なき身体とは、そして、そうした身体感覚に基づいて目指した残酷演劇とは、どのようなものであったのであろうか。

アルトーにとって、西洋の演劇は、演劇的なるものが台本に従属させられた、すなわちすでにひとつの形式として完結した構造において演じられる限界づけられた言葉の演劇にしか過ぎず、そのため舞台という場の可能性を、身体が持つ根源的な躍動性を引き出すものとは、アルトーにとっては感じられなかったといえるだろう。アルトーが考える演劇は、舞台の数々の障碍にぶつかりながらも直接舞台から生まれる芝居に基づくものであるといえ、言語が持つ構造性を壊し、直接的に身体的なるものをあらわにするパフォーマンスとしての空間であると考えられる。そこには、言語構造によって分節化され、器官化される身体、そしてそれらを普遍化＝抽象化する力＝権力に対するアルトーの嫌悪が反映されているとみることができると共に、根源的な生の躍動に裏付けられた身体、つまり器官なき身体を舞台の上において具現化しようとするアルトーの意識をそこに読むことができるだろう。すなわち、個別的な生成の過程の中で現れる身体の運動を舞台というメディア空間において再現させることが求められているのである。それ故、アルトーは、事前に言説化された台本を閉じた構造によって限界づけられているとみなし、それに対して、個々の場面を構成する演出を演劇的創造の出発点とて評価し、即効的なスペクタクルな空間として構成される舞台を見出そうとするのである。

こうした唯一の動作に基づいて演じられる個別的な身体からなる舞台を、アルトーは、演者と観客という役割に二分化された構造性から成り立つ西洋演劇としてではなく、観客全体を視覚的聴覚的な力の渦に巻き込み、麻痺させることを目的に、見る—見られる、あるいは演じる—演じられる関係性を解体し、反転しながら、劇場全体がひとつのスペクタクル空間として捉えようとする。そして、そこに見出されるのが、個々の身体の運動を通じてむき出しにされる暴力性であり、残酷性であるといえるだろう。その意味では、アルトーにとって残酷性＝暴力性とは、日常の安定した構造性を乗り越えた先見出される身体的なものであり、演劇はそうした残酷性＝暴力性による非日常的な関係性において創造的価値を持つものと捉えられているといえるだろう。

「娯楽の長い習慣が深刻な演劇という観念を忘れさせてしまったが、我々の表象のすべてを揺り動かし、イメージの持つ灼熱の磁力を吹き込み、ついには一度受けたら忘れられない魂の治療のように働きかける演劇こそ必要なのである。／働きかけるものはすべて残酷である。演劇は、局限まで推し進められた極端な行動という観念によって革新されるべきである。／大衆がまず感覚でものを考え、したがって普通の心理的演劇が大衆の悟性に訴えるの

は馬鹿げていると革新して、〈残酷の演劇〉は群衆のスペクタクルに手段を求める。莫大の数の、しかも互いにぶつかり合う麻痺した群衆の喧騒のなかに、たとえば今日ではあまりにもまれになってしまったが、民衆がこぞって町へ出る祭の日々や雑踏のなかにある幾らかの詩を探ろうとする。」(5)

アルトーは、このように日常的な身体の中に、制度的な枠組み＝構成された構造を読み解き、その構造性を暴力的に明らかにすることで超克を図ろうとした。そして、そこに見出されたのが、個々の身体が奏でる創造的な運動性であったといえるだろう。このことは、逆に、我々が日常的に感じている身体性／身体的なるものが、すでに何らかの形で社会的に制度化され、言説化されたものでしかないことを意味している。

こうした身体の構造化＝社会化にみられる単一的な根拠として人々を制度化する力について、ジャック・デリダは、法＝掟の視点から、そこに根源的な暴力といったものが介在していると捉えようとする。掟＝法が、根本的に制度の力として単一的な構造（構成された構造）を形作り、人々をその反復されていく自明性＝日常性に囲い込んでいくためには、他者／他なるものを抑圧し、排除していくことが必要とされる。そのような根源的な原－暴力について、デリダは、ヴァルター・ベンヤミンの神話的暴力と神的暴力、すなわち法／権利を基礎づける暴力と法／権利を破壊する暴力の影響の下に、根源的な暴力を二つに区分し、位置付けし直そうとする。根源的な原－暴力は、先ず掟あるいは法／権利が自らを創出し制定するために他者や異質なるものを抑圧・排除する暴力として現れるものであるといえ、それは、正に最初の一撃ともいえる実力行使として行われるものであり、全てがその実力行使という開始点をもって始められることになる原－暴力であるといえるだろう。そのことにより、法／権利は、単一的な構造の下に全てを吊り支えることが可能になるといえるのであり、そこに、根源的な暴力を通じて構成する構造を形作る創造的な過程をみることができるのである。しかし、法／権利が単一的、同質的な構造の下に成立するようになると、そこに創出的な暴力性からその構造化を維持する暴力への転換が起こることになる。それが、法／権利を維持する暴力として、全てをその構造化の過程へと回収する制度的な力として現れてくることになると共に、そのような制度的な力が普遍的な関係性となって日常性を反復させ、構成された構造として人々を規制していくことになるといえるのである。このように法／権利は、創出し制定する暴力から、維持する暴力へと転換する過程を通じて初めて、その制度的な力＝権力を普遍化させることが可能になる訳であるが、デリダは、そうした法／権利を維持する暴力が普遍化していく状況に対して、これまで抑圧・排除されてきた他者／他なるものとの関わりを通じて、新たに法／権利を破壊する暴力を捉え直し、法／権利におけるその構成された構造にずれ＝亀裂を生み出す脱構築を考えていくようになっていく。

「二つの暴力、すなわち法／権利を基礎づける暴力と法／権利を維持する暴力とをまずはじめに区別しておきながら、ベンヤミンはあるとき次のように認めざるをえなくなる。すなわち、一方の

暴力は、他方の暴力とそれほど根本から異質のものではありえない。なぜなら、法／権利を基礎づけると言われる暴力とは、法／権利を維持する暴力が語の強い意味で『再現前させ（ルプレザンテ）』たものであることが往々にしてあるからだ。そのうえで維持する暴力は、いわゆる基礎づける暴力を当然のこととして繰り返すのだ、と。」(6)

以上のように、デリダは、根源的な暴力＝原―暴力によって成り立つ掟＝法が、その構造において無根拠な形でしか正当化しえず、そのため自らの起源＝始まりを隠蔽せざるを得ないところに、掟＝法の脱構築の可能性を捉える共に、そこに他者との応答可能性による責任と正義の問題を新たに見出すことで、既成の枠組みを、その構成された構造の超克を図ろうとすることになる。身体性／身体的なるものの問題についても、単純な原―身体への回帰といった形ではなく――それが、身体の復権という形で語られることになるのだが――、こうした原―暴力の問題性から捉え直し、近代の構造性を超克していくことが必要とされているといえるのではないだろうか。法＝掟を維持し、その構造を普遍化する制度としての力＝暴力としてではなく、そうした法＝掟の無根拠性を明らかにし、神的暴力、つまり原―暴力としての構成する力から近代の構造に絡め取られている身体性／身体的なるものを攪乱することが考えられなければならない。

2・3、器官なき身体と内在的な生成過程

我々が日常捉える身体性／身体的なるものは、すでに社会的に構造化された中で自らの身体を身体として捉えているにしか過ぎない。人間は、生れ落ちた瞬間から、ひとつの名前を与えられ、血縁や地縁といった社会的な枠組みの中に組み込まれる。その意味では、どのような身体であろうと、すでにそこには社会的なもの、あるいは他者が介在しているといわざるを得ない。そのような社会的意味合いにおける他者たる身体の身体化を経て、いわゆる身体性／身体的なるものが受容される訳だが、その過程において大きな影響力を受け持つのが、言説による権力的な関係性、その差異の構造であるといえるだろう。そうした面から身体化の過程における言語の構造性をみると、そこには無垢なる身体といったものがどこにも関わってくる余地がないことをみてとらざるを得ない。身体は、言説的に分節化された中で、その機能的分化の下に様々な器官を構成することとなり、そのような種々の器官がひとつの機能をもった器官として名づけられることによって、普遍的なモデル化が行われ、その構造化の中で人々は身体を身体として認識していくことになる。つまり、われわれの身体は、言説化されることによって、初めて普遍的なモデルとして共通に認識できるように構造化されているといえるのである。こうした普遍的＝抽象的な身体モデルを受容することは、結果的に言語の関係性に組み込まれることになるが、その反面、本来身体に含み込まれていた無意識の欲望や暴力性、狂気といったものは普遍化の構造から抑圧・排除されることとなる。すなわち、この

ことは、身体が普遍化と抑圧・排除化の相反する境界的な在り方に分割されて立ち現れてくることを意味している。

我々の身体なるものは、このようにある分節的な構造によって意味化され、そのことによって初めて機能的な形で捉えられるようになったものである。だが、それ故に、その普遍化された身体図式は、ひとつの構造化によって構成されたものである以上、根源的な暴力を通じて創出する構成する構造と規範的な形で制度を維持する構成された構造による日常的な反復・持続の中で、絶えずその図式からこぼれ落ちていくもの、あるいははみ出していくものに侵犯されることになり、ずれ＝亀裂を生み出していくこととなる。しかし、そのようなずれ＝亀裂は、恣意性の制限という形で、構成された構造に回収され、再構造化が図られることになる。人々は、そのような構造化の力学によって、その自明な構造性の下に安定した日常性を反復することができるようになることができるのである。

こうした身体を取り巻く構造化の中で、その普遍化＝抽象化された図式を乗り越えていくために、単純に構造化以前の無方向＝無秩序な可能態としての原―身体に戻ればすむというものではない。我々は言説化された身体を通じてでしか自らを意識化できず、また、始まりの状況＝始原に誰も戻ることができない以上、〈いま―ここ〉という内在的な過程において問題を捉え直していかざるを得ないのではないだろうか。その意味では、物理的な身体としてではなく、〈いま―ここ〉においてどのように自らの身体イメージを構成しているのかを問わなければならないのである。

このように身体的境界にける構造化の問題をみてみると、一度構造化され、制度化された身体性は、簡単に変化・変容し難い側面を社会的な意味作用において持っているといわざるを得ないことがみてとれる。そのことが、自明性を伴って安定した日常性の構造をもたらすと共に、ある意味人々をその構造性に組み込み、拘束するような関係性を成り立たしているともいえるのである。だが、その反面、そうした日常的な反復・持続は、様々な他者／他なるものとの関わりから生起する一回限りの出来事性によって侵犯され、普遍性から個別性へ、すなわち普遍的な身体イメージからはみ出していく個別的な微細な差異によってずれ＝亀裂が生み出されていく面があることも見逃すことはできないだろう。そのような微細な差異化＝微分化の強度が、身体的境界に揺らぎをもたらし、多様な関係性へとつなげていくことになると考えられる。ドゥルーズとガタリが捉える器官なき身体もそのような強度の身体として、言説化され、器官化された身体＝有機体に対して、内在的な過程の中で多様化し、分子状に散逸する身体であるといえるのである。

「器官なき身体とは、諸器官をもぎ取られた空虚な身体のことではない。そうではなく器官として役立つもの（狼たち、狼たちの眼、狼たちの顎？）が、群れの現象にしたがって、ブラウン運動によって、分子的多様体の形をとって、その上に分配されるような一身体なのである。砂漠がみたされるのだ。だからそれは、もろもろの器官（オルガン）に対立するわけではなく、一つの有機体（オルガニズム）を構成するもろもろの器官の組織化（オルガ

ニザシオン）に対立するのである。器官なき身体とは、死んだ身体ではなく、生きた身体であり、有機体とその組織化を破裂させればさせるほどますます生き生きとし、ますますひしめきあうような身体なのだ。……器官なき充溢せる身体とは、多様体によって満たされた身体である。」(7)

以上のような身体の変容というものは、個別的な差異化＝微分化の強度において成立するものであるが、だが、それが普遍化＝全体化の構造に容易に回収されてしまうのは、生成変化の強度を普遍的なモデルとして取り出し、その流れを寸断するような形で外部性を持ち込む結果のためであるといえるだろう。身体を取り巻く構造化を乗り越えることを目的に意識的、主体的に生成の過程を捉えれば捉える程、それ自体が転倒した形で構造化、制度化し、生成のあり方そのものを虚構の外部性から吊り支える形になってしまうのである。あたかも、すべての根拠＝根源であるかのように。それが、新たな形で構成された構造を再構造化、再強化するようなことに陥っていくことになる。重要なのは、外部から構造化のあり方を問題にすることではなく、内部的、内在的な過程における生成変化の強度そのものをどのように反復・持続させ、ずれ＝亀裂を先へ先へと繰り延べていくかということである。そこにおいて見出されるのが、その内在的な強度的運動によって活性化する器官なき身体なのである。

「ＣｓＯ〔器官なき身体〕は強度にしか占有されないし、群生されることもないように出来ている。強度だけが流通し循環するのだ。ＣｓＯはまだ舞台でも場所でもなく、何かが起きるための支えでもない。……ＣｓＯは強度を流通させ生産し、それ自身、強度であり非延長である内包的空間の中に、強度を配分する。ＣｓＯは空間ではなく、空間の中に存在するものでもなく、一定の度合をもって空間を占める物質なのだ。この度合は、産み出された強度に対応する。それは強力な、形をもたない、地層化されることのない物質、強度の母体、ゼロに等しい強度であり、しかもこのゼロに、少しも否定的なものは含まれていない。否定的な態度、相反する強度など存在しないのだ。……ゼロから出発する強度の大きさとして現実が生産される。」(8)

その意味では、内在的な過程における強度の流れをどのように多様な方向に開いていくかが問われなければならないだろう。内在性、内部性には始まりもなければ、終わりもない。あるのは、その強度の流れ＝流通であり、それに基づく生成変化の過程なのである。ところが、変革や変化をすべての出来事＝歴史の終わりとして目的とするや否や、それは、単線的（リニア）な時間軸に絡め取られると共に、虚構の外部性からすべての個別的な出来事を支える構造化を成り立たせることとなる。このことは、虚構の外部性に立つことにより、誰にもそのあり方を問えない構成された構造をもたらすことにもなるのである。それ故、身体における生成の問題として求められているのは、このような大上段に構えた外在的なマクロな政治学ではなく、微細な差異の流れが分子状に生成する内在的なミクロな政治学であるといえるのではないだろうか。そのような差異化＝微

分化する微細な強度の流れが、多方向に開かれた欲望と結びつきながら織り成す襞として、身体的なるもが見出されていかなければならないだろう。襞は、内が外に、外が内に反転しながら、織り成される強度そのものとして立ち現れてくる潜在態そのものである。

「生成変化の線は、点と点とのあいだをすりぬけ、中間でのみ芽を吹くばかりか、最初に識別された点に対しては垂直方向に、隣接する点や離れた点のあいだに局限されうる関係に対してはこれを横断する方向に疾走するのだ。点は常に起源である。ところが生成変化の線には始まりも終わりもなく、出発も到着も、また起源も目的もない。また、起源の不在を語ったり、起源の不在を一つの起源に仕立てあげるのは悪質な駄洒落にすぎない。生成変化の線には〈中間〉があるのみだ。〈中間〉とは平均値ではなくクイックモーションであり、これをとらえるには〈中間〉をおさえるしかない。生成変化は一でも二でもなく、一と二の関係でもなく、二つの〈あいだ〉であり、二つのものに対して垂直をなす境界、あるいは逃走や転落の線である。」(9)

このような生成変化の過程において見出される身体は、ジュリア・クリステヴァが捉える意味での過程（プロセ）にある主体、すなわち主体の生成過程の最中において生起する身体の強度そのものであり、身体運動という出来事性によって他者に開かれた形でしか見出され得ないものであるともいえるだろう。クリステヴァは、父＝法の名において構成される一者性に対して、過程（プロセ）にある主体を意味生成性（シニフィアンス）の過程として、前記号性に常に告発され、裁かれる主体としてみなし、そこに多様な意味の生成を見出そうとする。それは正に、無意識なる欲動の流れに基づく前記号態（セミオティック）と、制度や法に基づく父なる象徴秩序態（サンボリック）との間に保留され、絶えず異質性に侵犯される主体であり、その生成過程そのものであるということになる。そのことにより、象徴秩序によって構成された単一的な構造、その停滞状態は欲動の流れ、その反復的な棄却＝否定性により白紙に戻され続けることになり、クリステヴァはそこに主体形成の快楽を捉えようとする(10)。

だが、クリステヴァは、そうした過程（プロセ）にある主体＝意味生成性（シニフィアンス）の過程を無意識の欲動による否定性＝反復的な棄却として位置付け、最終的に象徴秩序態（サンボリック）に再構造化されるひとつの回路として前記号態（セミオティック）を円環的＝循環的構造に回収してしまう形に陥ってしまうことになる。こうした主体＝意味の生成における内在的な過程をひとつの回路にしてしまうクリステヴァに対して、ドゥルーズは、内在的な生成の過程を潜在的なもの（ヴィルチュエル）と可能的なもの（ポッシブル）との問題として捉え、次のように述べている。

「……可能的なものと潜在的なものは、つぎの理由からしてもまた区別されるのである。すなわち、一方では可能的なものが概念における同一性という形式を指し示し、他方では潜在的なものが理念における純粋な多様体〔多様性〕を指示しており、そしてこの多様体が、先行条件としての同一なものを根底から排除するか

らである。結局、可能なものが『実在化（レアリザシオン）〔実現〕』をもくろむ以上、可能的なものは、それ自体、実在的なもののイマージュであるように考えられ、実在的なものは、可能的なものの類似であるように考えられるのである。……すなわち、可能的なものとは、実は、後から生産されたものであり、またその可能的なものに類似している〔実在的な〕ものに併せて、あたかも以前から存在するかのように捏造されたものである、ということを暴く〔天秤の〕分胴（タール）がある。それとは反対に、潜在的なものの現実化（アクチュアリザシオン）は、差異によって、発散によって、あるいは異化＝分化によって遂行される。そのような現実化は、原理としての同一性とは無縁であり、またそれにおとらず、プロセスとしての類似とも無縁である。……この意味で、現実化、つまり異化＝分化は、真の創造なのである。現実化は、あらかじめ存在するひとつの可能性の限定などによって遂行されることはない。」(11)

そこで捉えられているのは、可能的なもの（ポッシブル）と実在的なもの（レエル）との過程であり、また、潜在的なもの（ヴィルチュエル）と現実的なもの（アクチュアル）との過程であるといえ、それらの相違が問題にされているといえよう。現在という時点において捉えられる実在的もの（レエル）は、可能的なもの（ポッシブル）のある面が実現化したもののようにみられ、先行条件としての可能的なもの（ポッシブル）が実在的なもの（レエル）を位置付しているかのように捉えられるが、むしろ、それは逆で、実在的なもの（レエル）から可能的なもの（ポッシブル）を限定的な枠組みにおいて導き出しているのであり、同一的な構造においてお互いを位置付けし合っているにしか過ぎないのである。つまり、原因から結果をみているのではなく、結果から原因をその類似において見出しているのである。そこには、可能性を限定化しているという意味で、大きな錯覚が潜んでいるといわざるを得ないだろう。このような可能的なもの（ポッシブル）と実在的なもの（レエル）とにみられる同一性に対して、ドゥルーズは、潜在的なもの（ヴィルチュエル）と現実的なもの（アクチュアル）との関係を新たに見出すことで、その同一化の図式を乗り越えようとする。潜在的なもの（ヴィルチュエル）は、純粋な多様体、あるいは強度的多様体として、同一化を図る先行条件に捉われることなく、差異化＝微分化の運動において現実化されることになる。つまり、潜在的なもの（ヴィルチュエル）は、現実化（アクチュアル）によって限定されてはいないし、また、現実化（アクチュアル）は、潜在的なもの（ヴィルチュエル）に類似してはいないといえ、そこにあるのは、多様体である潜在的なもの（ヴィルチュエル）が差異化＝微分化によって現実化する生成運動そのものであるといえるのである。それが、創造的プロセスとして、様々な現実なもの（アクチュアル）を切り開いていくことになる。このことは、原因と結果を単一的＝リニアな時間軸に沿った関係において捉えるのではなく、原因と結果の間に差異化＝微分化の運動を見出すことによって、多様性が創造されていく過程を捉えようとするものであり、多様性に開かれていく差異化＝微分化の運動

そのものとして位置付けられるといえるだろう。

3、内在的な変革性としての身体問題

以上、ドゥルーズ―ガタリの器官なき身体とその生成過程のあり方をみてきたが、そこでみなければならないのは、器官なき身体ではなく、その潜在的な強度に伴う多様性に開かれた生成過程そのものではないだろうか。その意味では、我々が日常的に当り前の如く受け入れている身体なるものは、実は意外に曖昧な身体感覚によって構成されているといわざるを得ない面を持っている。様々な道具やメディアを身体の延長、その一部であるかのように使いこなすことができるのも、物理的な身体を超えて身体感覚が外部へとつながっていく要素を本来持っているからであると考えられる。つまり、現象として現れてくる身体は、外在的な第三者＝他者との関係によって構成されるものであって、本質的に可変的な冗長性を持っていると捉えられるだろう。だが、それが、近代（モダン）の構造において、ある普遍的＝抽象的な形で表象化されているところにこそ問題があるといえるのである。その意味では、変容していこうとする構成する力と制度化していこうとする構成された力との軋轢の中に立ち現れてくるのが我々の身体イメージなのである。つまり、身体的境界は、構造化の力動的な流れの中で、変容と制度という異なるベクトルに引き裂かれながら、イメージ化されていると考えられる。特に、今日コンピュータ／デジタル・メディアの高度化とその普及は、仮想現実（ヴァーチャル・リアリティ）という形でネット内への没入感と共に、人々の身体や意識そのものに変容をもたらすようになってきており、本来持っていた身体的境界の揺らぎ、その近代（モダン）の構造化に収まらないずれ＝亀裂を新たな形であらわにしてきている。

こうした身体的境界の揺らぎについて、モーリス・メルロ＝ポンティは、知覚との関係を通じて次のように述べている。

「もちろん、知覚するのは徹頭徹尾私の身体だというわけではない。……知覚がやってくるや、身体は知覚の前から消え失せるし、知覚が、知覚しつつある身体を捉えることは決してないのだ。仮に私の左手が右手に触れ、そしてふと、触りつつある左手の作業を右手で捉えようとしたとしても、身体の身体自身に対するこの反省は、きまって最後には失敗する。私が右手で左手を感じるやいなや、それに比例して、私は左手で右手を触ることを止めてしまうからである。それにしても、この最後の挫折は、触りつつある自分に触れることができるのだという私の予感から、一切の真理性を奪い去るわけではない。私の身体が知覚するのではなく、身体は、いわばそれを通して顕わになる知覚の周囲に組み立てられているようなものだからである。」(12)

メルロ＝ポンティは、左手と右手の例を通じて、知覚における触れる身体―触れられる身体の、あるいは見る身体―見える身体の反転可能性／可逆性をそこに見出そうとしている。見ることは見えることを、感じることは感じられることを同一的な身体の領域におけ

る相互的な二重の関係、すなわち入れ子構造状に襞が織り畳まれていく相互反転の過程として捉え、そこに身体を位置付けようとしているといえるだろう。知覚することとは、知覚されることを前提とし、それを事前に受け入れることによって外へと開かれていく。すなわち、知覚することとは、世界内の存在として、世界あるいは他者から知覚されている関係の中に組み込まれている複合的な生成の場において見出されることになるが、そのため、そうした知覚するもの―知覚されるものとの間に必然的にずれ＝揺らぎが生じてくることとなる。メルロ＝ポンティは、それを裂開として、自己＝私と世界＝他者が分岐していくダイナミズムにおいて捉えようとする。

そして、知覚する―知覚される関係が反転する身体的境界の揺らぎにおいて、自己を世界から生起させていく裂開が、生成のダイナミズムを生み出す構造化の強度として捉えられることになり、その自己と世界が裂開する生地として見出されるのが肉（chair）ということになる。だが、そこで見出される肉は、普遍性へと回帰する身体性の母体＝生地として位置付けられ、結果的に普遍性に回収されてしまうことになってしまっている。このことは、ドゥルーズ―ガタリにおける器官なき身体にもいえることで、生成の過程の中で多数多様性に開かれた潜在態として器官なき身体を前提にすればする程、普遍的な言葉として全ての根拠＝中心へと堕してしまうことになり、ドゥルーズ―ガタリはそれを巧妙に回避しようとしているが、物理的な身体性へとフェティシュ化される契機をはらんでいるといわざるを得ない。そこにその限界性をみなければならないが(3)、そこで捉えなければならないのは、身体的境界の揺らぎに伴う反転可能性を通じて立ち現れてくる世界の現れ方であり、その生成過程そのものではないだろうか。

その意味では、むしろそのような生成過程における身体の立ち現れ方そのものが重要なのであり、〈いま―ここ〉という現在進行形の最中に現れる身体、それは、様々な方向性に開かれた潜在態として見出される身体であり、微細な差異が戯れ、ひしめき合い、微粒子上に散逸する多様体として生成する身体であるといえるだろう。それ故、そうした身体は、今現在という時間軸においては、〈いま―ここ―にある〉身体としてひとつの停止点＝存在としてでしか捉えられないものであり、その今現在という時点から分子状に微細な形でずれていく運動体として、その痕跡においてしか見出すことができないものである。そのような〈いま―ここ―にある〉身体からずれていく身体は、正にひとつひとつの個別的な出来事性において生成する〈いま―ここ―になる〉身体であるといえるだろう。すなわち、〈いま―ここ―になる〉身体は、生生流転する身体として、ひとつの場所に留まることのない、その内在的な過程の中で永遠に今現在という時点＝〈いま―ここ―にある〉身体から反復＝ずれていくものであるといえるのである。

その意味では、以上のような内在的な自己組織化＝生成の過程の中で見出される身体性／身体的なるものが問われているといえ、そのことが、近代（モダン）の構造、特に情報化の進展に伴う普遍化＝抽象化のあり方を問い直していく上で有効な視点を提供することに

ならなければならない。近代（モダン）は、普遍化の過程の中に、様々な個別的な出来事を取り込み、秩序化を行う高度なシステム――ドゥルーズ―ガタリ的にいえば、公理系に基づく資本主義機械ということになる――から成り立っている。そうした構造化、あるいは情報化から横断的な逃走線を描いていく上で、その普遍モデルから排除・抑圧されていた身体性／身体的なるものを内在的な生成変化の過程において捉え直すことで、その近代（モダン）の構造性を明らかにし、そのことが逆に構造化された日常性の反復にずれ＝亀裂を生み出すことにつながっていかなければならないだろう。

例えば、ドゥルーズ―ガタリの多数多様性の影響の下に、アントニオ・ネグリは、グローバル資本によるポストモダン的な状況に対する新たな主体としてマルチチュードを位置付け、そこに多様な主体あるいは複数の身体性／身体の複数性を生きる内在的な存在を見出そうとする。そこには、資本主義のグローバル化に伴い現れれてくる脱中心化、脱領土的なネットワークとしての新たな支配権力＝〈帝国〉への移行に対して、「マルチチュードが有する脱領土化を推進する力は、〈帝国〉を下から支える積極的な力であると同時に、その破壊を呼び求め、必然的なものとする力でもある。」とみなすことで[14]、マルチチュードの内在的な強度のあり方を積極的に評価するネグリの意図をみることができるだろう。

だが、そこにみなければならないのは、虚構の外部性に立った超越的な主体による革命（Explosion）／マクロ政治学から多様な差異化＝微分化の運動に基づく内在的な変革（Implosion）／ミクロ政治学へと、〈帝国〉による脱中心的なネットワーク権力＝グローバリゼーションに対抗するための新たな主体の変容ではないだろうか。そのためにも、そうした近代（モダン）の図式を超克する意味で、生成の力動的な過程、その強度の流れから近代化のあり方を問い直すことが必要とされているといえ、多様な生成性に開かれた存在として身体の問題――だからこそ、ドゥルーズとガタリは、器官なき身体の内在的な潜在的多様性をそこに見出そうとし、自らも多様な一個の存在としてのドゥルーズ―ガタリに生成変化（になること）しようとする[15]――は重要な要因として大きく関わってこざるを得ず、そこに問わなければならないのは〈いま―ここ〉という内在性における複数の身体性／身体の複数性であり、異質なる他者との関わり＝出来事性であるといえるだろう。

（1）構成する構造と構成された構造は、アントニオ・ネグリが憲法制定権力との関連で位置付ける構成的権力（構成する権力）と構成された権力を基に、より広い概念として主体化の生成との関係で本論では用いることにする。憲法制定権力として構成的権力（構成する権力）は新たな形で憲法を制定・施行することで行使されるが、ひとたび法体系が構築されることとなると、憲法は上位法として、全ての法律を支え、統合する構成された権力へと移行していくことになる。ネグリは、そこに変革する権力から維持する権力への変質を捉えると共に、多様性へと開かれていくダイナミックスな構造化を促す力として構成する権力を捉え直そうとする。／アントニオ・ネグリ『構成的権力―近代のオルタナティブ―』

松籟社 一九九九年 p.411―416、440―443

(2) ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』河出書房新社 一九八六年 p.17

(3) ドゥルーズ、ガタリ 同上 p.21

(4) ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『千のプラトー』河出書房新社 一九九四年 p.182

(5) アントナン・アルトー『アントナン・アルトー著作集Ⅰ 演劇とその分身』白水社 一九九九年 p.138

(6) ジャック・デリダ『法の力』法政大学出版局 二〇〇〇年 p.83

(7) ドゥルーズ、ガタリ 同上 p.47

(8) ドゥルーズ、ガタリ 同上 p.176―177

(9) ドゥルーズ、ガタリ 同上 p.337

(10) ジュリア・クリステヴァ「過程（プロセス）にある主体」『ポリローグ』白水社 一九八六年 p.27―38／クリステヴァは、「過程（プロセス）にある主体」をアルトー論として著しており、アルトーを通じて欲動における身体的な棄却＝反復的な否定性から意味の生成と解体の過程が捉えられている。そこにアルトーの器官なき身体を過剰性、その潜在的可能態として肯定的に捉えるドゥルーズ―ガタリの生産する欲望との方向性の相違を読み取ることができよう。

(11) ジル・ドゥルーズ『差異と反復』河出書房新社 一九九九二年 p.319―320

(12) モーリス・メルロ＝ポンティ『見えるものと見えないもの』みすず書房 二〇〇一年 p.19―20

(13) このことは、ドゥルーズ―ガタリが資本主義システム批判として提示したスキゾ―パラノ自体が、それと裏腹に、一九八〇年前後の日本においてある意味マーケティング的手法として記号的に消費されてしまったところに、言葉のフェティシュ化をみることができよう。

(14) アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『〈帝国〉―グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性―』以文社 二〇〇三年 p.90／それまで大量生産による大規模工場によって「大衆化された労働者」から第三次産業に拡張された「社会化された労働者」へと労働者概念を拡張してきたネグリは、グローバル資本による脱中心的なネットワーク権力＝〈帝国〉に対抗する多様な主体／諸主体としてマルチチュードを捉えようとするが、そこには労働主体の延長としてマルチチュードを位置付けてしまう要素が抜け切れていず、ドゥルーズ―ガタリの多数多様性を単一化してしまう方向性をはらまざるを得ないところにその問題性がある。

(15) 哲学者ドゥルーズと精神科医ガタリという二つの個性が出会い、ドゥルーズ―ガタリに生成変化（になること）について、次のように述べている。「われわれは『アンチ・オイディプス』を二人で書いた。二人それぞれが数人であったから、それだけでもう多数になっていたわけだ。……見分けがつかなくなるように巧みな擬名をばらまいた。なぜ自分たちの名をそのままにしておいたのか？習慣から、ただもう習慣からだ。今度はわれわれ二人の見分けがつかなくなるように。われわれ自身ではなく、われわれを行動させ感じさせ、あるいは思考させているものを、知覚できなくするために。……人がもはや私と言わない地点に到達するのではなく、私と言うか言わないかがもはやまったく重要ではないような地点に到達することだ。われわれはもはやわれわれ自身ではない。それぞれが自分なりの同志と知り合うことになる。われわれは援助され、吸いこまれ、多数化されたのである。」／ドゥルーズ、ガタリ 同上 p.15

〈参考文献〉

Gilles Deleuzé Félix Guattari *"L'Anti-Œdippe"* Les Editions de Minuit 1972／ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ　市倉宏祐訳『アンチ・オイディプス』河出書房新社　一九八六年

Gilles Deleuzé Félix Guattari *"Mille Plateaux"* Les Editions de Minuit 1980／ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ　宇野邦一、小沢秋広、田中俊彦、豊崎光一、宮林寛、守中高明訳『千のプラトー』河出書房新社　一九九四年

Gilles Deleuze *"Difference et Répétition"* Presses Universitaires de France 1968／ジル・ドゥルーズ　財津理訳『差異と反復』河出書房新社　一九九二年

Gilles Deleuze *"Le Pli:Leibniz et le baroque"* Les Editions de Minuit 1988／ジル・ドゥルーズ　宇野邦一訳『襞―ライプニッツとバロック―』河出書房新社　一九九八年

Jacques Derrida *"Force de loi"* Editions Galilée 1994／ジャック・デリダ　堅田研一訳『法の力』法政大学出版局　二〇〇〇年

Antonin Artaud *"Le Théâtre et son double: Collection Métamorphoses IV"* Gallimard 1938／アントナン・アルトー　安堂信也訳『アントナン・アルトー著作集Ⅰ　演劇とその分身』白水社　一九九六年

Julia Kristeva *"Polylogue"* Edition du Seuil 1977／ジュリア・クリステヴァ　赤羽研三、足立和浩、北山研二、佐々木滋子、沢崎浩平、高橋純、西川直子訳『ポリローグ』白水社　一九八六年

Maurice Merleau-Ponty *"Le Visible et L'invisible"* Éditions Gallimard 1964／モーリス・メルロ＝ポンティ　滝浦静夫、木田元訳『見えるものと見えないもの』みすず書房　二〇〇一年

Antonio Negri *"Le Pouvoir Constituant. Essai sur Les Alternatives de modernite"* PUF 1997／アントニオ・ネグリ　杉村昌昭、斎藤悦則訳『構成的権力―近代のオルタナティブ―』松籟社　一九九九年

Antonio Negrí Michael Hardt *"Empire"* Harvard University Press 2000／アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート　水島一憲、酒井隆史、浜邦彦、吉田俊実訳『〈帝国〉―グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性―』以文社　二〇〇三年

The Modern Construction and the Body
——Immanent Becoming and Reformation as the Body without Organs Sees It——

Masaji MAEDA

This paper takes up the problem of the body's nature as a way to criticize modern construction. Modern construction consists of the reason or the logos. Because the body is considered unreasonable, and modern construction tries to oppress or eliminate the body's nature under the binominal schema(such as the subject-object dichotomy).

Addressing these circumstances, this paper deals with the body's nature from the view point of the Body without Organs. The Body without Organs is defined by Gilles Deleuze and Félix Guattari. It is related to the concept of Desiring-Machines, and indicates multifarious Becoming Movement in the process of difference. In this system of production Desire is not a lack, but a surplus itself. Deleuze and Guattari appreciate it positively as the Desiring-Production. The Body without Organs is not the socialized body or the organic body, but the incomplete body which potentialized the intensities.

But what we must recognize about the Body without Organs, is not macro politics which is based on the sole molar construction, but micro politics based on the molecular movement and the becoming. Through the change from the macro vision (explosion) to the micro vision (implosion), the becoming-molecular is the immanent process of becoming on the body, and in this sense, it is necessary for the body to appear as a multiplicity of potential, which the minute difference weaves with relation to each event. In order to get over modern construction, it is important to find out a new body's vision, which changes from external revolution to the potential of immanent reformation.

〈**Key Words**〉

The Body without Organs、Difference、Immanence、Muliplicities、Becoming